

西村さんは、東京オリンピックの年を単なるスポーツだけのものにしたくないと、平和悲願の梵鐘づくりを発願された。大学をやめ広島原爆落下地点に近い所に居を移し、退職金などの私財を投じて鐘づくりに奔走されたのである。私もその心意気にうたれ、実費での制作をひきうけるといふ、いろいろな意味で異色の鐘となった。

東京・池上の本門寺の鐘は約二千貫（七・五トン）の大鐘である。この梵鐘の鋳込みの三十九年九月二十四日はちょうど工場のある富山県高岡を台風が通過、電気がとまり、あわや鋳造中止かと思われた。ところが、ふしぎなことにその直前にあらしはやみ、青空さえのぞいた。その間にこの大梵鐘は無事鋳ることができた。科学的にいえばこの時高岡が台風の入ったというだけのことかもしれないが、私には生涯忘れることのできない神妙なありがたい思い出であった。六百字の銘文の最後に本門寺第七十九世、日定大僧正の詠まれた和歌

新なるこの鐘の音のめでたさよ 鷲の山より祖師も聴くらむ

がそえられ、この鐘に一層の風韻を添えたと思う。

### 高岡平和の鐘

「朝、成田様へお月詣りをする支度をしていたところへ、吉田五十八先生より電話あり。成田山の鐘が割れているらしいからみてくれ、とのこと。早速出かける。三時近く成田着。参拝の後ただちに江戸鋳物師、粉川氏鋳作の鐘を調べる。ヒビは大小二十三カ所にて音は絶望なり。なお、竜頭は後から取り付けたものの如し」これは、昭和三十八年四月三十日の私の日記の一部である。この時の調査がきっかけで、成田山新勝寺の鐘をつくることになった。昔から鋳物師の信仰厚い不動明王にささげる鐘を、自ら手がけられることを心からうれしく思った。新勝寺にはこのほか、本堂前の大香炉とそれを収める香閣の天井の雲文板なども納めた。いずれも今は亡き吉田先生からのお話によるものである。

成田山への毎月のお詣りには、大香炉に香をささげて身を清め、不動明王に祈念